

# 東北紀行

Tohoku Travelogue

第 14 号 / 2017 年 1 月 / 編集：大浪健一（石巻専修大学）

## ご挨拶

仙台青葉学院短期大学 高野 宏輝

昨年春に入会させていただきました高野宏輝と申します。一昨年まで旅行会社で 26 年間ほど勤務しました。思い起こせば、2012 年に宮城で開催された第 27 回全国大会を、旅行会社の一社員としてお手伝いさせていただきました。会員の皆様方が演題発表されるお姿を、憧れをもって拝見しておりましたが、この度本学会に入会させていただき、大変光栄に思っております。

旅行会社退職後に、法政大学専門職大学院で 1 年間学びました。経営管理修士（MBA）と中小企業診断士資格を取得した後、昨年 4 月から仙台青葉学院短期大学ビジネスキャリア学科で経営学担当講師として教壇に立っております。学生に対する講義を行う傍らで、自治体の観光地域づくりセミナー講師や観光振興ビジョン策定支援業務に従事しております。

旅行会社在職中は、各種組織団体が開催する学術会議、国際会議、全国大会などを総合的にプロデュースするなどのイベント運営業務（MICE）を中心に行ってまいりました。観光は、地域活性化に資するといわれていますが、実際にイベント参加者用にお楽しみいただくツアーを企画する中で、集客の受け皿となる良質な観光施設が不足しており、十分に地域にお金が落ちる仕組みがとられていないと強く感じていました。このような問題を解決するには、経営学的な視点から観光地や個別観光施設のマーケティング、マネジメントを学ぶ必要があると考え、大学院では、経営学を学びました。今後は、観光庁が育成をすすめるDMOの設立支援や、その配下にある観光事業者（宿泊施設や飲食、輸送、物産、観光施設等）のコンサルティングにも携わりたいと考えております。また、教育機関に勤務していることもあり人材育成に興味があります。地域振興を担う若く有為な社会人の育成にも尽力したいと存じます。

その他、わたくしのライフワークともなっている「貞山運河」の活用に関して、掲載させていただきます。

## 1. 「貞山運河」とは

貞山運河には以下のような特徴がある。

### ①400 年以上の歴史を有する

伊達正宗の命により、江戸時代初期に仙台城築城につかう木材や米など物資の輸送に活用するため開削された。明治時代には、幻の 3 大築港計画（野蒜築港）に伴って、運河の開削が更に進み、49 キロの長さには達する。鉄道が開通するまで、水運として頻繁に利用された。貞山運河の名称の由来は、伊達政宗の戒名（瑞巖寺殿貞山禪利大居士⇒「貞山運河」）からくる。

### ②総延長 49 キロにのぼる日本一長い運河

宮城県の 7 市 2 町（岩沼市、名取市、仙台市、多賀城市、塩竈市、東松島市、石巻市、七ヶ浜町、松島町）にまたがる。3 つの堀（木曳堀、新堀、御舟入堀）と 2 つの運河（東名運河、北上運河）から構成される。

### ③潜在的にもっている豊かな自然環境

美しい松林、のどかな田園風景と野鳥の飛来が見られる干潟が存在していた。東日本大震災の津波被害で打撃を受け、甚大な被害を受けた。現在はその回復の途上であるが、過去の自然景観を取り戻すことによって、人々の憩いの場となりえる場所である。

## 2. 「貞山運河」活用に向けた取り組み

### ①貞山運河研究所

貞山運河を貴重な宮城県の地域資源として後世に残していこうと考える民間任意団体である。前身は、（一社）東北ニュービジネス協議会海洋ニュービジネス研究部会である。シンポジウムの開催や利活用指針の策定などを進める中で、東日本大震災による大きな損害を受け、活動は一時停滞したが、多様な人材の参画による新たな組織の設立を目指し、平成 26 年 7 月「貞山運河研究所」を設立した。民間企業経営者や学識経験者、自治体首長などが参画し、シンポジウム、ウォーキング、カヌー体験、過去に頻繁に利用されていた木造船（さくば）の復元など、様々な活動を展開している。ホームページ英訳部会、パンフレット部会、フットパス部会、ドローン部会、歴史部会、レクリエーション部会、閑上聞き取り調査部会など、具体的な活動を推進する部会を設置している。エリア毎の部会設置も今後検討している。仙台市蒲生から塩釜市を流れる「御

舟入堀」の利活用を目指す「御舟入堀プロジェクト」が貞山運河流域から生まれている。今後、5つの運河各々に、このようなプロジェクトが出てくることが期待される。

## ②「貞山運河再生・復興ビジョン」

貞山運河は、そのほとんどが宮城県の管理下にある。宮城県土木部河川課は、自らが河川管理者として運河の活用を企図した「貞山運河再生・復興ビジョン」を平成25年5月に策定した。運河が持つ多面的な機能に期待し、運河群を復興のシンボルと位置づけ、活力に満ちた沿岸地域の再生に活かしていくことを表明している。

基本理念は、「運河群の歴史を未来への繋ぎ、運河群を機軸とした「鎮魂と希望」の沿岸地域の再生・復興」とし、基本方針、基本目標を掲げている。

短期目標（平成27年度まで）は「被災した運河郡及び沿岸地域の日も早い復旧、復興理念の共有化と参加」、中期目標（平成28年度から平成32年度まで）、は「運河郡及び沿岸地域における「集いの場」の再生と広域的な連携の拡大」、長期目標（平成33年度以降）、「運河郡の歴史を未来へと繋ぐ、100年を見据えたビジョンの発展」とし、「貞山運河再生・復興推進会議」がその推進をリードする体制を構築した。このビジョンは、策定時点で全てが確定しているものではなく、今後、新たなビジョンを構想、付加し、成長を続けていく計画である。このため各事業主体が連携し、意見交換できる場を設置し、具体的な事業の企画・実施や進捗管理、事業間の相互調整等を図る必要がある。そのため、県関係部局、国関係機関、仙台湾沿岸市町、学識者等からなる「貞山運河再生・復興推進会議」を設立し、ビジョンに基づく取り組みの具体化や実施、進捗管理、総合的な調整を担うこととした。

ビジョンの一環として、宮城県は官民連携で桜の苗木を植樹し、新たな景観創出を考えている。「桜植樹ボランティア」「寄付金」「苗木や資機材」「桜回廊サポーター」等の募集が行われている。

## 3. 貞山運河利活用提言

ハード、ソフト両面の整備が必要であるが、7市2町にまたがる貞山運河利活用には、息の長い取り組みが必要である。筆者は、以下のような長期的なビジョンを提案する。

### 【コンセプト】

**多様な魅力のある水辺の親水空間に**

**賑わいあるグローバルな交流の場を形成する**

**【短期：地域に根ざした楽しく健康的な親水空間の確立】**

初期段階として、地域において強い興味、関心を持つ宮城県内シルバー層のニーズを満たす施策を中心に行う。地元において楽しく明るい雰囲気での活動を拡大継続する。

「歩く」をテーマにした「徒歩観光」により、健康や新鮮な体験を提供する。

貞山運河研究所は、委託業務の受託や対外折衝などを今後強力に推進していくためには、法人格の取得が望ましい。目指すべき組織のあり方、役割を検討し、エリアマネジメント組織として法人化を進める。

### 【中期：利用想定世代の拡大とターゲットの地域的拡大】

地元のシルバー世代中心の活動から利用想定世代を若者やファミリーにも拡大していく。外客誘致の観点から地元のみでなく全国各地からの集客ができるサービス内容の拡充を図る。各エリアの特性を考慮した拠点施設（川の駅）整備と飲食・宿泊サービスを提供するカフェ、レストラン、ホテルや、アクティビティ（カヌー、SUP、レンタルサイクル）、小型観光船運航など各種サービス事業者を育成する。イベント運営では、ウォーキング、サイクリング、マラソン、トライアスロン等のスポーツ大会や、アートプロジェクト、写真コンテスト、貞山運河検定など文化イベントの仕掛けを行う。

行政だけで賑わいのある運河の形成、管理運営はできず、民間組織との連携が欠かせない。マスタープランの策定や占有許可、占有使用料の収受、基本的な施設管理などは行政が担う。民間事業者で構成する組織は、河川占有主体となり、補足的な施設管理、観光誘致プロモーションなど、顧客のニーズを把握し、対応していく。官民連携による組織のあり方を検討し、設立を行うべきである。民間事業者の開業についても、コンサルティングを行い、開業促進を行う。

### 【長期：全体最適化とグローバル展開】

各エリアで立ち上げた拠点を全体として最適化し、連携させることで相乗効果をえる。外国人観光客へのプログラム、プロモーションも強化していく。各エリアの特性を考慮した拠点施設（川の駅）をリバーウォーク、舟運でつなぐ。それぞれのエリアの特徴を顧客に楽しませ、滞在時間、宿泊期間の長い顧客獲得を目指す。観光による最大の経済効果を目指す。仙台国際空港を基点とした各エリアの舟運ネットワークを構築し、松島含む湾岸エリアの観光需要の最大化を目指す。津波など防災対策の先進地として、海外からの視察団受入に連動し、欧米からロングトレイルを好むハイカー誘致を狙う。